

『エリザベス朝時代の復讐悲劇 1587—1642』

(第2章 復讐の背景)⁽¹⁾

菊池 英夫

(1)

セネカと彼の悲劇についての批評的な資料は非常に完全であり又手に入りやすくもあるので、広範囲にわたる要約は不必要である。しかしながら、セネカの悲劇は一時エリザベス朝時代の悲劇に重大な影響を与えたので、この時代の劇作家達に影響を与えた彼の作品中にある幾つかの要素について簡単な調査が試みられる必要がある。

セネカの悲劇の主な三つのテーマは、『トロアデス』において、またオイデプスの悲劇的な物語におけるように、運命の気まぐれについての教えであり、また、『サイエステス』や『メディア』や『アガメムノン』におけるような重大な犯罪の描写と殺人の悪辣な結果、そして『オエタエウスのヘラクレス』と『ヒッポリタス』におけるように、単純さと貧しさ、そして貞淑さを好む弁論などである。三つのテーマのうち、殺人者とその行為を扱うものは最も重要であり、必然的に、特に1559年から1581年間にセネカの作品が英訳された後のエリザベス朝時代の人達に、最大限の感銘を与えたのだった。ほとんどの悲劇も流血と恐怖の為の十分な機会を与えた「強力なテーマ」の上に築かれている。セネカは古代の大犯罪を演劇化することに喜びを感じていた。例えば、『メディア』、『サイエステス』、『アガメムノン』、あるいは『ヒッポリタス』と『狂えるヘラクレス』に見られるような異常な状態である。彼は心理的な発展に結びつくような、そして熱狂についての詳細な研究を可能にした主題のみを取り上げたのである。例えば『サイエステス』における憎悪、『メディア』における嫉妬、『ヒッポリタス』における愛などである。野心、憎悪、愛は熱狂の中でも彼が好んで研究したものである。犯罪心理学が彼を魅了していたので、情熱を持ってアトレウス、メディア、クリュテムネストラなど理性の範囲をはみ出したあの復讐者たちを情熱を持って描いたのである。極悪非道な犯罪が写實的に描かれ、悪徳が最も力強い色彩で描かれている。

致命的な過ちの場合を除いても、セネカの描いた犯罪者たちは、十分に責めを負うべ

きである。何故なら、罪を犯す意思というものが存在していたからである。サイエステスは陵辱と近親相姦とにより有罪であった。メディアとクリュテムネストラは、自らの行為について充分に認識していた。アエギストスとファエドラは、遺伝をもちだして弁解の言葉としているが、セネカは彼らを有罪と見なしている。何故なら彼らは犯罪的な遺伝を単に、彼らが最悪の本能に屈したことへの弁解として使ったからである。人間には善悪どちらかを選ぶ自由があり、また犯罪的な遺伝を退ける事ができると、セネカは確信していた。意思が全能なのである。それ故に、犯罪的な遺伝は罪を犯した先祖に対する罰なのであり、子孫の利益となるような事情ではない。従ってエテオクレスとポリニセスの運命はオイデプスと彼の先祖の者たちの悪事の結果なのであり、アエギストスの姦通はサイエステスの近親相姦の結果なのである。アトレウスの息子達の悪行の数々は、もしもアトレウスが彼らに悪例を示すならば何時の日にか彼への処罰となるだろう。しかしながら、もしも罪を犯した人間が後悔し、これまで犯した悪行を軽減するかけりをつけようとするならば、事態の修正は常に可能なのである。死は常に最後の逃避であり、罪の償いである。セネカは自殺が名誉を救い、あるいは余りにも苦痛に満ちた人生からの逃避を齎すとき、それに賛成している。だが懸命に闘わずに屈するよりは、不運と闘うほうがもっと勇敢だと感じている。

セネカが流血の行為と肉体的拷問をリアルに描く中で取り入れている喜悦によって増幅される残酷さと共に、恐怖は恐怖の上に積み重ねられる。だが無垢の者に対してのみならず罪を犯した者に対してすら、応報あるいは後悔の苦しみの最中には、哀れみを感じられるのである。不幸なファエドラは最後には哀れまれることになり、盲目のオイディプス、後悔しているディアニラ、シーシウス、そしてヘラクレスの場合も同様である。いやらしいサイエステスすら同情を呼び起こす。肉体が恐怖を引き起こすのに元々用いられたのと正に同様に、この哀れみの情を強要する場合にもしばしば用いられる。観客に既に知られている差し迫った恐怖に、気づかないでいる登場人物達が描かれているときの、劇的アイロニーは頻繁に存在する。

セネカの悲劇は、殺人あるいは甚だしい負傷に対する血縁者による復讐とか、あるいは嫉妬による動機からの深刻な復讐を強調している。『アガメムノン』では、クリュテムネストラは娘イフィゲニアの死に対してアガメムノンに復讐しているが、彼女もまたアガメムノンの不義に対する嫉妬によって、そしてまた自分自身の姦通の結果に対する不安感によって駆り立てられているのである。アエギストス、すなわちサイエステスと娘の間の近親相姦の結果生まれた子供であるが、彼はアトレウスによる彼の異母兄弟殺しに対して、またサイエステスが経験させられた残虐行為に対して、血族による復讐を求めている。エレクトラの最初の言葉はまだ子供のオレステスに向けられているが、彼女は即座にオレステスを彼女の父殺しに対する血族の復讐者と心に描いているのである。『オイテ山上のヘラクレス』でヘラクレスによって殺されたケンタウロスは、死の苦悶

の内に傷口から毒を取り出し、ヘラクレスへの媚薬と称してディアニラに与え、こうして実質的に自分の死に対する復讐を確保するのである。メディアは彼女を捨てたが為にジェイソンに対して、またクレオンとその娘に対しても、彼らがジェイソンの新しい結婚に手を染めたという事で、復讐する。ディアニラは自分達の家庭にヘラクレスが妾を引き入れたとして、完全復讐をもくろむが、彼女の実際の復讐は我知らずに果たされるものである。何故なら彼女はケンタウロスの贈り物が致命的な特性を持つということを知らないのであるから。『狂えるヘラクレス』においてジュノーは、ヘラクレスが夫の浮気の申し子であるという理由で彼に復讐する。『ヒッポリタス』においてはテセウスが、陵辱と言いつてられた事の為にヒッポリタスに復讐する。アトレウスは彼の妻の陵辱と彼の王国の篡奪に対してサイエステスに復讐する。

復讐が個人的なもので本当に血縁者による場合には宗教的な義務感を帯びるので、幽霊によって促進されるかもしれない。『アガ멤ノン』への前口上でサイエステスの幽霊はアエギストスに直接話し掛け、復讐の為に彼を生んだ母を思い起こすようにと彼に強制しているように思われる。『トロアデス』においてアキレスの幽霊は、単に舞台上で述べられるだけであるが、トロイ人に対する最後の復讐を教唆している。『サイエステス』において前向上を述べるタンタラスの幽霊は、復讐の女神のうちの一人に先導されて、子孫の家に心ならずも悪疫のように存在し、致命的な行為を誘発する。そしてそれは、クリュテムネストラとアエギストスがオレステスの手にかかって倒れるまで止む事はないのである。

復讐者たちは時に死者の幽霊を見るという幻覚に鼓舞されるときがある。メディアは憤激の最中にまず一群の復讐の女神達の姿を、次いで自分の死に処罰を求める切りさいなまれた弟の姿をした幽霊を心に描く。偽筆の『オクタヴィア』においてオクタヴィアは、彼女自身は復讐者ではないが、殺された弟の幽霊を見る。又この作品では、いまだ復讐を果たしていないアグリッピナの幽霊が、自分を殺した息子の結婚の血塗られた終焉を予告する為に現れる。アグリッピナの影が彼女の夫の霊に会うように思われるとき、幽霊同士が争うのである。夫の霊は息子ブリタニカスの殺人を計画したとして彼女を襲うのである。又殺人者ネロの死を要求するのである。ディアニラは自分の犯した罪を知った後ティーシーポネーが復讐を要求して立ち現れるのを見て、自殺するべく走り去る。ヘラクレスは、彼を破滅に導く為にジュノーによって遣わされたティーシーポネーら復讐の女神たちを狂気の内に見るのである。

復讐は個人的なものでもあり、集団構成員全員に共通のものでもある。この場合それは加害者の総ての子孫と、傍系の総ての親族にも及ぶのである。アガ멤ノンはアトレウスの犯罪を償い、ヘラクレスはジュノーの罪を、そしてポリクセナはパリスによってなされた悪を償うのである。復讐者は、加害者その人だけでなく、気兼ねなくより大きな苦しみを齎すべく、彼の息子達にも復讐して満足するのかもしれない。ヘラクレス自

身はジュノーの復讐に遭い害を受ける事はないが、狂気の内に妻と子供達を殺すのである。アトレウスはサイエステスを生かしておいてこの上なく満足している。そうすれば後者は、殺された息子達を素材にした恐るべき宴会を味わう事が出来るであろうから。

ジェイソンが息子達を深く愛している事を悟ったとき、メディアは心を鬼にして、息子達が彼女の父親と弟の死の埋め合わせとなるだろうと考えて彼らを殺す。集合的な復讐という規則に対する説明は、それが原始時代から伝わっていることと共に、次にあげるメディアの台詞が、よき説明となるかもしれない。

犯罪によって利益を得る者が

犯罪を犯した

罪のない者も罪ある者とともに倒れなければならない。というのは前者も罪によって益する事を免れ得ないし、それ故にやはり罪を犯しているからである。

復讐の機会が失われるかもしれないというのでなければ、復讐者はその意図を隠したりとばけたりするようにと警告される。緩慢な復讐が最大の喜びを齎す。メディアもアトレウスも名誉の総てをかなぐり捨て、筆舌に尽くし難い仕返しをこいねがう。嫉妬のあまりに怒り狂ったデアニラは、ヘラクレスに対して前代未聞の罰を求める。そのような感情と共に復讐は、同害復讐法の枠を超えて、被害者に加えられた危害を遥かに凌駕するかもしれない。

もっと上手にやったというのでなければ

復讐したとは言えまい

(『サイエステス』195—6)

通常の復讐ではなく、厳しく恐るべき処罰が発生する。タンタラスによって神々に、またプロクネによってテレウスに供された人肉の宴が、サイエステスの眼前にも繰り広げられる。ジェイソンの子供達は、苦悶に責めさいなまれた父親の眼前でゆっくりと命を奪われ、欄干から彼の足元に放り投げられる。狂気に陥った二人の復讐者たちは、生命が肉体を去ったずっと後になってから、アガ멤ノンの死体を滅多切りにする。

無知か騙された共犯者が時々、復讐の手助けに遣われる。メディアは彼女の子供達を毒をしみこませた部屋着と共に、クレウサの所に送る。アトレウスは、息子達にサイエステスを招くように命令する時、この悪辣な目的の気配をなんら示す事はない。犯罪は地獄で、あるいは血縁者によって地上で罰せられる。デアニラとファエドラの場合と同様、自殺は殺人に対する罪滅ばしの復讐なのかもしれない。一瞬のためらいが、一時的に復讐者を思い止どまらせるのかもしれない。アトレウス、メディアそしてクリュテムネストラは、犠牲者を破滅に誘う為に思うがままに人を騙す。実際の狂気は『狂ったヘラクレス』においてのみ現れる。それはジュノーによって送りこまれたものである。しかし復讐者たちは復讐の女神達の神聖な狂気によって吹き込まれたと主張するかもしれない。そして彼らの従者達に関心を呼び起こすほど奇妙に振舞うかもしれない。狂気

は人を騙す目的には決して用いられる事はない。半ば発狂したディアニラは、ヘラクレスが自分と子供達を取り除くために狂気を装っていると激しく非難しているが、状況と対話の双方に常に皮肉が存在する。そして、災害の超自然的な警告を伴う前兆が、悲劇的な出来事がそれぞれ起こる前に現れるのが通例である。これらの劇には生と死、そして宿命についての修辭的な警句が豊富である。

セネカの悲劇の大部分ではカストロフィーのための一般的な動機として復讐が行われるので、実際は総て同じ表現方法の下で結びつく。セネカの演劇は以前の出来事を振り返る、あるいはやがてくる出来事を予想する独白あるいは対話で始まる。タンタラスの不吉な影響力を除けば、幽霊は時に前口上を述べるが、その後の行為には加わらない。この劇が筋の危機的な展開の直後に始まり、劇的な事柄といえばほんの手の込んだ大団円に過ぎないので、第1幕全体がこのように解説的である。第2幕は、大団円の主役が復讐の実行を計画する対話で成り立っている。第3幕は、その主役の上昇力が急速に成長すると共に、敵対者たちを面と向かって、またほとんど平等な仲で対面させる。第4幕には演技の途絶えか、もしくは大団円の部分的な実行が用意されている。第5幕で、大団円が完成される。

『サイエステス』は、1例と見られても良いかもしれない。第1幕でタンタラスの幽霊が観客の前にやがて起こる悲劇を提示し、犯罪と復讐の雰囲気の説明する為に、以前の出来事を回想する。第2幕でアトレウスは、護衛と会話しながら復讐の手立てを計画する。第3幕では、アトレウスとサイエステスが出会う。王冠を譲る申し出がサイエステスになされ、受領される。第4幕ではサイエステスの息子達の死に、大団円の部分的な成就が含まれている。そして第5幕では、人肉の宴会で大団円が完結する。最初から最後まで、唯一復讐の演劇化に関心のあるセネカのそれらの劇は、最初から心に刻まれ、実行過程においてほとんどもしくは何らのためらいもなく導かれる大団円、即ち復讐の執行をもって結び付けられて、完全かつ因果的な全体となるのである。

(2)

もしエリザベス朝時代の復讐悲劇に登場する人物の劇的な動機を十分に理解しようとするならば、場面設定がなされている外国の人々に対するイギリス人の意見に対しては幾分かの関心が払われてしかるべきだろう。特にイタリアの物語とその登場人物は、エリザベス朝時代の悲劇の舞台を支配し、制作された劇のタイプに深い影響を及ぼしたのだから。

イタリア人はほとんど例外なく格別に嫉妬深く、復讐心を抱く悪党であると見なされたが、もっと良く見させる様な参照例も幾つかある。故にファウントは1587年にアンソニー・ベイコン宛てに、イタリア人の賢明さとフランス人の軽率さとを比較した手紙を

書いている。1549年歴史家ウィリアム・トマスは、イタリア人は口の利き方が控えめであり、悪評とは縁のない人たちであると述べている。名誉毀損に対して死をもって報いる彼らの過敏な自尊心の故に多くの人が彼らをほめないが、「だが彼らを非難するよりはむしろ許すというのが私の意見である。というのもそのような危険に対する不安感が彼らの言語を良く知ろうとすることにもなるので、自ら引き起こすのでなければイタリアで20年間、非難あるいは悪事を目にすることもなく過ごすことになるかもしれない。」1630年に1人の無名の説教師が、イギリス人による全面的な外国人非難に対してごくかすかな抗議の声を取上げてあげた。

「そのようなくだらない文句は、最大多数であって総てではないことを意味する誇張法に過ぎない。名称はより大きな部分の後で出来上がるという事で十分なのに。イタリアを悪人の温床とし、酒びたりをオランダ人の徽章とし、うぬぼれをスペイン人に付きまとう心の影であるとする者は、精々これらの場所がそれぞれそうたいしてひどいわけではないと言っているわけで、彼の言葉は、より大きな部分がそうであるに過ぎないとこじつけられるようなものだ。」

「より大きな部分がそうである」という事は、平均的なエリザベス朝時代の人々の不変の信念をしっかりと表していた。トマス・ライト（1601）は次の様に書き記した。「わが国民は（大多数）非常に打ち解けて、容易に自分をさらけ出す。スペイン人とイタリア人はそれを大いにためらう・・・彼は復讐をするつもりでも、友達であるような顔つきをするだろう。好む所に危害を加える為、どこか遠く離れた所で目的をいろいろ試してみる事ができる。憎む所を賞賛し、更なるもくろみのために特に好む所を悪く言う。自らの陰謀のゆえに我々よりも良く時代を見つめる事が出来る。また意図する所を果たす為により適した時期を選ぶ事が出来る。」ピーター・ヘイリンは1621年に次の様に記録している。「イタリアの」人々は大抵は真面目で、尊敬すべきであり、また賢く優れた人々である（と一人のスペインかぶれのイタリア人が言った）が、次の三点がなければということであり、つまり彼らの肉欲は不自然であり、二つには彼らの悪意は満たし難く、三つには、彼らの行動は欺瞞に満ちている。これに、彼らは誓うや否や罰当たりの口を利き、人を中傷するよりは殺してしまうだろう、とつけ加えられるかもしれない。」

エリザベス朝時代の人々は、マキャヴェリその人の中にイタリア人の性格を見てとったのであり、彼の名前は英語では悪人を意味する同音異義語であった。「不正直な人を表現しようとする者はそういう人をマキャヴェリアン〔権謀術数家〕と呼ぶ」と一人の無名作家が1642年頃腹藏なく言明した。エリザベス朝時代の庶民はマキャヴェリの作品を恐れおののきながらじっと見守っていた。「罪深き文章は地獄由来の書き物、即ち悪魔の呪文から取られたもので、ルキアノスの旧約聖書かマキャベリの新約聖書のいずれかだ。」無数の言及が彼をあらゆる悪を養っていると非難し、そしてあらゆるエリザベス

朝時代の人々にとって、彼の名前は裏切りと殺人、そして無神論を表す以外の何物でもなかった。

妻や姦通者を見つけ次第即座に殺すことは、どこ土地でも初期の法律の一部であったが、イタリアにおけるそのような事件の数とその経緯において示された残酷さはイギリス人にショックを与えたので、これは些か説明を要するだろう。イタリアにおいては妻の貞節に関する夫の要求は、もっと北の国々における求婚と婚約という堅固な根拠によって与えられるそれとは大いに異なっていたのである。イタリアの若い花嫁は、夫とごくわずか知り合っただけで、女子修道院あるいは父親の家を出たのである。そして結婚はしばしば一つの便宜に過ぎなかったもので、夫側の権利は大抵制約つきであり、夫は真の愛情には大して拘らずに主に契約の外面的な履行を求めたのである。

過ちを犯している妻への復讐についてのルネッサンス精神は、他人の勝利をそこね、世間に対し自らを正当化しようとする欲望に比べれば、そうたいして性的に嫉妬深い（このことは広く言いふらされているけれども）わけではなかった。妻の不貞的行為によってイタリア人の夫が部外者の嘲りに曝された時彼は世論によって正当化され、また殺人に訴えた場合、法律によって宥恕されたのである。彼の行為の裏にある真の動機、即ち個人的な正当化は、夫だけでなく、罪を犯した女の兄弟や父親たちもまた同じ復讐をするようにしばられていると感じているという事実によって示される。例えば、ショッキングな例が1455年の『ペルージャの編年史』に見られる。この中である女性の兄弟が彼女の誘惑者に対して妹の両目をくり貫くように強制し、次に彼を公衆の面前で打ちのめすのである。16世紀の間にイタリア人の生活がなおいっそうスペインの影響下に入るようになった時、本物の嫉妬心によって遥かに恐ろしい処罰がなされたが、これらは以前に存在し、またルネッサンスそのものの精神の上に打ちたてられた、不義に対する仕返しとは区別されなければならない。スペインの影響が衰えるにつれて、また17世紀末に向かうにつれて、これらの過剰な嫉妬心は、公式な愛人を認めるという無関心によって置き換えられるまでに減少したのである。

エリザベス朝時代の人々はイタリア人の結婚の特質を理解できなかったのである。この国では夫は夫婦間の愛情というよりはもっと契約の外面的な条件の方を考えたのであり、また（互いに無関心と思われるような場合でも）夫を世間の嘲りに曝すような妻のいかなる不義の結果も、速やかに悲劇的なものとなった。このようにしてイタリア人の姦通そして妻殺しはイギリス人にとってとりわけ残酷で無慈悲なものに思われ、こういうイギリス人はイタリア人の結婚を自分自身の結婚観からのみ見ていたのであり、イタリア人はその復讐心あふれる嫉妬心からイギリスでは悪名高き存在となったのである。ファインズ・モリソンは（1617年）次の様に記録している。「姦通は（嫉妬によるあらゆる怒り、あるいは妻や娘や姉妹達に対する求愛のしるしとして）通常〔つまりイタリア人によれば〕私的な復讐や殺人によって非難される。また諸侯や判事たちは、国家に

たいする真の情熱によって彼らの正当な復讐を判断しつつ、復讐者側が密かにあるいは少なくとも本心を隠して行うほど賢いということ以外は、殺人が起きた後では大して取り調べを行わない。」

私的な復讐の習慣は、しかしながら、不法な恋愛事件に対する復讐にとどまらなかった。公のあるいは私的な何代にも渡る交互復讐というものが法律上の習慣であっただけでなく、その訴追の中で犯された殺人は勇敢で賞賛に値する行為であると認められた。イタリア人は、どんなに些細な危害に対しても、正当あるいはその反対にかかわらず、法廷に委ねることなく復讐を行うことで名高かった。そのプライドは大変高かったので極々僅かな侮辱に対してすら復讐も深刻なものとなった。「彼らは性格的にどんな少しのそしりあるいは危害についても全く我慢が出来ないのである。・・・そしてより偉大な人達が不実な殺人によって「復讐を果たすのである。」。こういう復讐は常に秘密であり、殺人の場合には集団的なものとなる。復讐は不名誉な手段で、時には大いに不釣り合いな人数で、喜んで、誇らしげに実行されたのである。

イタリア人復讐者の長期に渡る敵意というものはイギリスでは諺ほども有名であり、(サンクワイヤーと同様) まさしく復讐の最も遺憾に思われる特徴のひとつであった。1592にナッシュは次の様に書いている。「受けた危害に対して復讐できるようになるまで人はそれについて知るべきではないとイタリア人は言っている。」さらに1593年には「犬の記憶ほど長続きするものはない。これらのイタリア人は老いぼれの犬であり、受けた危害を終生記憶に留めて置くだろう。横っ面を張られて30年後に復讐が果たされたという話を聞いた事がある。」それは復讐における芸術性であって、たとえ何年経とうとも運命の犠牲者が弱る瞬間を待つ事であり、復讐しようとする狂熱的な—しかし何ら危なげのない—決意、これなどは頭に血の上った直進的なイギリス人には理解できない事であったが。そうではあったがそれは、イギリス人を魅了し恐怖に震え上がらせたのである。復讐におけるイタリア人の精妙さは、1592年のナッシュの次の言葉のように、ただ恐怖とひどい嫌悪感の表現のみ引き出し得るだけであった。

「最後に、猫をかぶってあらゆるマキャヴェリ主義、清教徒主義、そして敵対者と共にあってそれとなく上辺を飾る事、また私が憎み害を与えようとする者に寄せられる友情に抗議すること・・・そして結局人殺しをし、その人のために悲しんで見せるというようなイタリア伝来の事柄は、・・・こちらに危害を加えた者の奴隷となり、復讐の機会を窺って相手の足にキスをしたり、こちら以外に誰のためにもならないかもしれないような方法で危害者を罰するのに厳しかったり、目的があつて人を使っておきながら放り出すとか、こちらの秘密を知る彼の破滅を求めたり、何か殺人とか策略のために雇ったことがあったら、こちらのことを漏らす心配があるから、密かに彼らを不和にし、互いに突き刺しあうようにする。あるいは、もし彼らを雇うのに失敗すれば、双方を絞首刑台に向かわせるような具合に互いに相手の機嫌を取るようにすること。こういった事

やその他無数の策略は、見知らぬ国々を旅して学んだ偽善なのだ。」

イタリア式復讐の華々しい更なる特徴は、ジェンティレットによって力説されたが、エリザベス朝時代の人々のマキャヴェリに関する知識の大部分は、彼の作品より得たものである。「彼（マキャヴェリ）の国の名誉によれば、復讐と敵意は永続的なものであり、和解できないものである。そして事実復讐を果たす以外に大いなる歓喜、楽しみ、満足を得るものは何もないのである。故に、ご都合次第で彼らの敵に復讐できる場合には、ある奇妙で野蛮なやり方に従って彼を殺してしまう。そしてその最中に魂と肉体の双方を苦しめる為、彼に数多くの非難の言葉と危害を加えて、自分達になされた攻撃を思いださせる。そして時に危害者の血で彼らの両手と口を洗い、生きる事を希望する危害者に対し悪魔に我が身を与えるよう強制する。つまり可能ならば、彼の肉体を殺す過程で魂が呪われる事を求めるのである。」

秘密と安全とを同時に兼ね備えた武器ともいうべき毒薬は、イタリア式復讐の伝統的な手段であった。ジョフリー・フェントンによって1579年に翻訳されたイタリアのギチアルディニの歴史は、ファインズ・モリソンが「人口に……膾炙している」と述べたピアンカ・カペロの毒薬による死のような物語の他に、イタリア式殺人と残虐行為についての多くの例をエリザベス朝時代の人達に与えたのである。ギチアルディニの中で彼らは、カエサル・ボルジアの二枚舌の事を読んだのである。ボルジアはリヴェロ・デ・フェルメによる彼の叔父殺しに復讐するため、ウルシニとヴィテロゼとデ・フェルメとを友好的な宴会に招待し、そこで後の二人を殺してしまった。同じ出典により人々はカエサル・ボルジアによる弟殺しと、妹クレチアとの近親的な関係と推測される事件にまつわるスキャンダルも知っていた。ヘルクレスとヒッポリト・デステについての話にも更なる不誠実さが見られた。エッゼリノ・ダ・ロマノにより行われた恐るべき残虐行為についての報告は、イギリス人旅行者によって本国に送られた普通のゴシップと同様、彼らの想像力に深く影響を与えた事であろう。当時の考えでは、トマス・アダムスは（1614年）完全に公正に悪魔の宴を「イタリアの殺人の大海原」の一部を成すと表現する事が出来たのである。

イタリアとイタリア人に関するこのような意見があったので、エリザベス朝時代の人々がイギリスのイタリア化に不安を抱き、イギリス人旅行者によって見出された今流行の悪徳を疑惑の目で眺めたとしても大して驚くに当らない。イタリアは墮落した影響力を及ぼす国であると他国によってしばらくの間見なされていたが、この道徳的墮落にイギリス人新教徒達のローマカトリック教に対する恐怖感が付け加わった。しかしエリザベス朝時代の人達はカトリックの教義を憎悪したのと同じく無神論も又更に恐れ、イタリアへの自国の旅人達がイタリアに蔓延していた無神論的な考えを敏感な心に植え付けられたまま帰国するのではないかと、普段から心配していたのである。無神論、性の墮落、そして殺人は、ファインズ・モリソンの次に引用するありふれた報告によれば、

イタリアで学ばれる悪徳のうちの幾つかに過ぎなかった。「そして何故なら徳を学ぶ事は難しく、悪徳を学ばない事、あるいは一旦学んだそれらを捨て去る事は更に難しいからである。そういうわけで彼らは次の様に言っている。つまり余りにも多くのわが国の天使達がただ馬鹿丁寧な悪魔になってイタリアから帰国していると。『校長』の中で「イタリア人のなりをするイギリス人は悪魔の化身である。」という言葉を用いるアスカムの所見は有名である。

イタリア人の欺瞞と偽善もまた、特にイギリスの廷臣達に深く影響を与えてきたと信じられて以来、恐れられるようになった。イタリア人の遺伝的な欺瞞性について意見を述べた後でトマス・パルマーは(1606)嘆かわしくも次の様に書いている。「彼の地を旅行する他国民は、我々があの病気の臭いを発散し始めていると言うだろう。」ジョシュア・シルヴェスターは1620年にデュ・バルタスの作品の翻訳という本題からそれて、彼がイタリア式の謀略に似たものを目にしたと警告した。

争いに満ちた野心、フローレンス化する国々。

ビショップ・ホールは(1616年)尋ねた。「我々はこれまで借用したことのない、何という悪影響を我々の中に持っていることだろうか。・・・そこでは決闘という悪魔の技と慣習とを学んだ。その中で人々は流血に名誉を求め、栄光ある人間屠殺人になるという野心を教えられる・・・実際のマキャヴェリ主義の中で、即ち曖昧で不誠実な言葉とする不正行為の技・・・外国での話が平和の伝染を危うくしてきたその他多すぎるほどの悪が備わっているが、どこのものであろうか。」その答えはもちろんイタリアであった。

結局の所、エリザベス朝時代の人々はイタリア人の秘密で欺瞞的な復讐の影響を恐れていたのである。それはイギリス人の気性にとっては全く異国のものであり、大陸の悪徳に成り得るにすぎないものであった。ハリソンは1587年に、この時代の人たちのこの問題に対する姿勢を最も良く要約している。「これは・・・わが国の大いなる破滅に向かうであろう。それは普通貴族や身分の低い紳士の子息たちをイタリアに送り込むことである。その時から彼らは単に無神論、不信心、悪辣な会話、および野心的で横柄な態度、これらの他は何も故郷にもたらさないであろう。その反対に出て行ったときよりも遥かに悪くなって帰国するということが起こるであろう。現に一人の紳士が、出かけたときにはごく熱心なプロテスタントであったのに、帰国の暁には次の様に言う具合になってイタリアからこのほど帰国した。「信仰も真実も維持されるべきである。この場合それらを変更なく保持すれば、更なる目的は失われる事も邪魔される事もない。また復讐が十分に果たされれば許しのみが示されるであろう。」

イギリスのその当時あった一般的な意見では、フランス人は何かといえば復讐するぞとすぐ脅すが、とかくそれを実行に移しがちだと、特に見倣されていたわけではなかった。彼らは自分の友人に対してすら欺瞞的で偽善的ではあったが、しかし憎悪すれば正

に脅迫者になるか、あるいは向こう見ずになり、即座に仕返しをし、また仲直りしやすい連中でもあると認められていたのである。ファインズ・モリソンは(1617年)彼らがすぐさま憎しみを和らげるという事について力説している。

総て实际的な目的から、エリザベス朝時代の人々の意見では極悪ということと、イタリア人とスペイン人の旺盛なる復讐心とを区別していなかった。非難にあたって両者はしばしば結び付けられたのである。1610年のロバート・ジョンソンの言葉からの引用は、その十分な例を与えてくれるだろう。

「スペイン人は繊細で、心に抱く主意を入念にこっそりと包み隠し、言葉の上では確信的なことを述べるが、上辺を飾った確かな友好の下に隠し続ける。そして友人達の無垢な心を際限のない悪意で裏切るのである。またそのように激しい情熱に駆られるので、大方の場合危害の性質を遥かに上回るほどの復讐を実行する。突然表に現わすような事はせず、じっと機会を待って、時の流れと共にどれほど多く育成され、手付かずのままにされていたかによって、相手に与える打撃をそれはもう倍加させるのである。」

ほとんど異論なくドイツ人は、「長期間心に抱き、維持し続けるために」復讐者とみなされてきた。『ハムレット』に関連してデンマーク人についてのモリソンの話(1617年)は興味深い。「だから[デンマークの]紳士達は死刑だと非難されてはいないが、それは各国の大衆の集会によってのみ可能であり、財産の没収もなされていない。また彼らの間での互いの悪行と殺人のため、私的な復讐によって普通にそれらを実行している。」

トルコ人の間で普通の血なまぐさい闘争は、リチャード・クノレスにより1603年に触れられている。その時期に書かれたトルコについての沢山の本によりイギリスの読者達は、オットマン帝国の血に飢えた支配者達の起こした事件や個人的な履歴に非常に詳しく知っていたのである。そのことについては1634年にサー・トマス・ハーバートによって語られた一つの悲劇的な物語を取り上げれば十分であろう。ペルシャの貴族ショウ・アッバスの息子ミズラは軍と共に華々しい勝利を収め、人々にも愛されていた。そこで彼の父親は嫉妬して彼を軍隊から呼び出し、密かに彼を盲目にしてしまう。ミズラ王子は視力を失った事に対し流血の復讐を誓う。年々精力の衰えつつあったアッバスは次第にミズラの年若き子ファティマを好きでたまらなくなっていく、彼女への愛におぼれ、彼女を唯一の慰めと呼ぶようになっていった。ミズラがこの執着振りを悟ったとき、長い間に熟成されていた復讐の念がめらめらと燃え上がり、アッバスへの仕返しに彼は吾が娘の首をしめて殺害し、数日後に毒をあおって自ら死んでしまうのである。

(3)

エリザベス朝時代の人々が、イタリア人の小説と彼らによるフランス語からの翻訳物や

模倣作品とを、彼自身が作った英語による翻案物と共に読みさえすれば、イタリア人と彼が自分の舞台に登場させたその他の国籍の人々についての彼の意見を確認する事が出来たのでした。歴史上のおよび噂による、旅人の報告書に見られる悲劇的な殺人事件についての彼の知識に、事実から取られた多くの悲劇的な物語と、伝統的な素材を想像力を使って再加工したいいくつかの作品とが付け加えられた。

悲劇的な小説のあるものは純粹に痛ましい内容のものに関係があったが、普通悲劇は殺人事件から出来てきたものであった。ひとつのタイプの物語がある残虐な事件とそれが愛人あるいは愛された者とに与える影響とを強調して述べている。その様なものの例としてはシュール・ダ・ロシロンの妻についてのボッカチオの話があった（第4日、第9話）。妻の夫は殺害された彼女の愛人の心臓を彼女が食べるようにと与え、彼女はそれを知るや自ら命を絶ってしまう。バンデルロはいくぶん似た様な内容で、嫉妬した夫が愛人による妻あるいはその愛人殺しについて書いている。その内のひとつでは（第2部、第8話）夫は過ちを犯した妻に自分の手で愛人をつるすよう強制する。マスキオもまた（第22話、第45話）背信的な妻達の事を語る、彼に割り与えられた物語を持っている。復讐の集合性は、極悪な嫉妬と残虐さと共にフロレンティノの第8日目の最初の話の中に見られる。その中で夫は罪を犯した妻の親戚の者達と彼女の愛人とを宴会に招待し、皆を召使達の手で殴り殺させる。それから妻は死んだ愛人の体に紐で結び付けられ餓死するまで放置される。もう一つの復讐がサバディノ・デグリ・アリエンティ作『ポルレタネ』という第9の小説の中で語られる。この中でマラテストはレリアと駆け落ちし、怒り狂った彼女の父親に冷酷に殺害される。レイラは死の部屋に放り込まれ、愛人の傍らで息絶える。

物語ではイタリア式復讐の長期間にわたる記憶と悪巧みに長けた残虐性を例証するのに事欠かないし、血縁による復讐の動機も無視されているわけではない。イタリアの悲劇的な小説では血縁による復讐はそれほど主たる地位を占めていたわけではなかったが。典型的な1話はバンデルロ作（第I部、第45話）で、その中で一人の奴隷が主人殺しの復讐をする。あくどいイタリア式復讐の本質は別の所で（第IV部、第1話）描かれている。そこではデオダティに金銭上の問題で謀られたと、また噂で傷つけられたと誤信したトルチが、いすに座るように誘うと、いすはたちまち彼を捉えてしまう。トルチに雇われた共犯者がどうする事も出来ない犠牲者を殺す。そして二人は遺体を隠す。トルチの復讐の考え方についての次の話は、エリザベス朝時代の悪辣な復讐者を解明してくれている。

「それから復讐の悪意ある気分が彼の頭の中に入ったので、彼はジェロニモ（デオダティ）を殺し、しかも正義の問題で悩む必要のないような、それでいながら復讐の実行者としてあらゆる人々の心の中に残るであろうような、とりわけ賢明な方法で復讐しようと決心したのである。」

もう一つの粗野で恐るべき復讐がアントン・フランセスコ・ドニの第11番目の小説に

語られている。一人の高貴な騎士には復讐に備えている一人の敵がいた。ある日わずか数人の友人に囲まれているとき、その勇敢なる騎士は敵と一団のごろつきどもにより取り押さえられてしまった。そして彼の命と友人達の命を助けると言う約束で、彼は自分が裏切り者で、無神論者で、異端者であるということを告白している書類に署名するよう強制される。すぐさま悪漢は騎士を暗殺し、彼の命のみならず名誉も魂も奪ってしまったのである。

イタリア人小説家達による更に悲劇的な物語は16世紀を通じてベルフォレの『悲劇物語集』(1559-1570)によりフランスとイギリスじゅうに広まった。これは後にロセットの『現代悲劇物語集』により1614年に模倣された。ベルフォレの物語の大半はイタリア語からの翻訳であるが、いくつかは「バルセロナ伯爵の死について、及び、息子ジョフロワがいかに復讐をしたか」(第76史話)といったその他の典拠に由来する。しかしながら最も重要な話は、「兄(あるいは弟)ファンゴンに殺された父オルヴァンディルの死にたいし、その時以来デンマーク王となったアムレトが、いかなる奸策を以て復讐したか、及び、アムレトの物語におけるもうひとつの出来事」と言う物語で、それはエリザベス朝時代の演劇に最も深い影響を与える事になる話であった。

恐ろしい企みがなされ、イタリア式の復讐の物語で、しかもエリザベス朝時代の劇作家に人気のあった種類のものというのが、ロセットの第11番目の史話に含まれている。それは「愛する人を殺めた男にたいしてある貴婦人が仕掛けた残酷な復讐について」であり、その中でフルーリエは彼女の愛人の殺害に対する復讐を確実に実行する為、殺人者クロリザンデとゆくゆく結婚するふりをする。彼女は彼とこっそり逢引の約束をし、彼が到着するやいなや彼はロープを巻かれてまんまと縛られてしまう。フルーリエはそれから彼の鼻と耳を切り取り、歯と爪を抜き取り、指も切り落とそうとする。そして終に彼の心臓を切り出し火の中に投ずる。家に戻って彼女は愛人の殺害と自分がした復讐とについて書き記し、毒薬をあおるのである。

ウィリアム・ペインター作『逸楽の館』(1567-1568)が始めてエリザベス朝時代の一般大衆に翻訳の形でイタリアとフランスの小説を紹介した。この中にある夫のぞつとするような話が見受けられる。彼は妻の愛人を殺し、そのどくろを杯代わりに日々酒を飲むよう、また骸骨と共に暮らすよう妻に強いるのである(第I巻、第57話)。また別の話では(第I巻、第58話)、妻が姦通を犯しているのを夫が見て密かに彼女に毒を盛る。マルフィ公爵夫人の物語も(第II巻、第39話)、タンクレッドとギスマンダの悲劇物語(第I巻、第39話)同様語られている。そして最後に、ムスタファが嫉妬深い妻にそそのかされた父のソリマンに殺される話もあるのである(第II巻、第24話)。

1574年ジョージ・ターバーヴィルの『悲劇物語』が現れた。ここには夫を殺した専制君主ニオクラテスにアレティフィラが復讐をする話(史話第II)だけでなく、夫が妻に愛人の心臓を食うように強制する話(史話第IV)も語られている。またアルボヴァイン

の良く知られた物語（史話第Ⅴ）も見られる。実際にあった復讐話を語る次に現れた翻訳作品はジョージ・ペティの『ペティの快樂の小館』（1576年）で、夫を殺されたカンマによるシノリクスに対する復讐話と、プロクニがテレウスに復讐するという古典的な話が載っている。1577年ロバート・スミス作の『不思議で、嘆かわしく、悲劇的な史話』がマホメットという名の奴隷が主人に復讐するという、ベルフォレとバンデルロの作品にもある話をまた取り上げている。『ウイリアム・ロングヘッドの生と死』（1593年）の中でトマス・ロッジは、娘を汚した君主にジュリアンが復讐するという話を取り上げている。これはウイリアム・ロウリーの悲劇『色欲で破滅』の元として使用された物語である。1597年、トマス・ビアドは彼の『神の審判劇場』の中にアルボヴァインの物語を入れた。

当時遅れて出版されたとはいえ劇作家達に典拠として使われて、おそらく最も重要な悲劇物語集とは、1621年と1624年の間に印刷されたジョン・レイノルドの『殺人者に対する神の復讐の勝利』であろう。第Ⅰ部、第1史話は、一家族そっくり殺してしまう嫉妬深い女の復讐を物語っている。同作品の第2史話は愛人を殺害した男に対する女の復讐を物語っている。また第4史話はミドルトンの『取り替っ子』のための典拠となっている。不実な夫へ妻が毒を盛る話は第Ⅱ部、第6史話にあり、一方第7史話は後にシャーリーの『乙女の復讐』に使われた話を語っている。第Ⅱ部、第8史話は殺された愛人の為に女が復讐するもう一つの話語っている。第9史話は義理の父による母親殺しに娘が復讐する話である。第Ⅲ部、第13史話はある年配の女性が自分の夫と密通が疑われる女中に毒を盛るという話で、夫が彼女と別離すると復讐の為に彼を暗殺させるのである。第Ⅳ部、第19史話では侮辱された妻が夫に自分に対して復讐するよう煽りたて、その実行中に彼が殺されると、彼女は夫の殺人者を殺させるのである。第Ⅴ部、第21史話では二人の妹達が、自分達を支配している姉に毒を盛り、そして残った二人のうち姉の方が何とかして妹を押さえつけようとする、妹は復讐の為に彼女を暗殺させるのである。第Ⅵ部、第29史話では捨てられた女が仕返しに愛人を殺す話、そして第30史話には愛人を殺された妻の復讐の形を変えたもう一つの話がある。

これらの様々な物語集は、エリザベス朝時代の劇作家に対しこの上ない素材の宝庫を提供しただけでなく、舞台上の劇筋と登場人物の性格描写とを劇的に表現された真実として受け入れるよう観客を訓練もしたのである。そしてこの事は、外国人が有する一般的な非道さや二心ある旺盛な復讐心については、その他の典拠に由来する多くの偏見が存在することを裏書きしていたのである。

注

- (1) First Princeton Paperback Edition (1966): Fredson Bowers, *Elizabethan Revenge Tragedy 1587-1642* (Princeton University Press, 1940) PP. 41-61